

國學院大學學術情報リポジトリ

人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安達, 匠, Adachi, Shou メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000004

人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携

安達 匠*

*あだち しょう（國學院大學図書館／筑波大学図書館情報メディア研究科博士後期課程）

抄録：

近年図書館・博物館・文書館連携が注目されはじめているものの、この異種館連携の具体的方針は明確ではない。そこで本論文では人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携に焦点を絞り、その実態を明確にするとともに具体的な異種館連携への方策を提示することを目的とした。

調査は異種館連携の実態を把握するために質問紙調査を、そして具体的な連携の事例を詳細に調査するため聞き取り調査を実施した。その結果異種館連携は積極的に実施されていないものの施設・組織に連携事例が見られる山形大学において「紅花プロジェクト」として積極的な連携が行われていた。この山形大学の事例は異種館連携を推進する上では注目すべき内容である。

“Cooperation between University Libraries and University Museums for the Academic Materials on Humanity Fields”

RUSUME

Recently, the libraries, the museums, and the archives cooperation begin to be paid to attention. But the concrete policy of the different kind pavilion cooperation is not clear. It aimed to narrow the focus to the university libraries and the university museums cooperation intended for the academic material on humanity fields, to clarify the realities, and to present the strategy to concrete different kind pavilion cooperation in this thesis. As a result of the investigation, Yamagata University "Benibana(Safflower) project" can be called a content to which it pays attention in promoting the different kind pavilion cooperation.

Adachi, Shou

1. 研究目的
2. 研究方法
 - 2.1 目録の連携
 - 2.2 展示の連携
 - 2.3 組織の連携
3. 結果
 - 3.1 質問紙調査
 - 3.1.1 目録（データ）の連携・統合
 - 3.1.2 展示（施設・デジタル）の連携
 - 3.1.3 組織（人・施設）の連携
 - 3.1.4 質問紙調査の考察
 - 3.2 聞き取り調査
 - 3.2.1 A 大学の調査
 - 3.2.2 大谷大学の調査
 - 3.2.3 山形大学の調査
 - 3.2.4 聞き取り調査の考察
4. 大学図書館・大学博物館連携の現状分析と要件

1. 研究目的

近年学術メディアを取り扱う施設、図書館・博物館・文書館の異種館連携（以後、博物館（Museum）、図書館（Library）、文書館（Archive）の連携から「MLA 連携」と表記）が注目されつつある[註1]。しかしこの MLA 連携は具体的に何をもって連携と見るか、その基本概念は

不明瞭と言える。そこで本論では MLA 連携を想定する際、先ず取り扱うメディアの相関関係を明確にし、そこから連携の方向性を位置付けた（表 1）。

まず資料をレベル化し、1 次資料、2 次資料、3 次資料の三段階とした。1 次資料を唯一性の高い希少資料、2 次資料を流通資料、3 次資料を目録資料とし、低次（3 次・2 次）資料と高次（1 次・2 次）資料が補完・活性化する関係と位置付けた。この資料の相関関係より、今回の研究では図書館（2 次）資料と博物館（1 次）資料の関心に焦点を定め、その資料を主として扱う図書館と博物館の異種館連携を対象とした[註 2]。

しかし現状では MLA 連携同様、図書館・博物館連携の情報は極めて少ない。こうした中、図書館・博物館の現場で具体的にどのような連携が行われているのか、またその現状から連携の要件もしくは連携への提案は可能か、以上の調査分析を本研究の主旨とした。

資料レベル	取扱い 難易度	内容	図書館	博物館	文書館
1 次資料	難	希少資料	貴重資料 (図書館 1 次資料)	博物館 1 次資料	文書館 1 次資料
2 次資料	中	流通資料	図書館 1 次資料	博物館 2 次資料 (レプリカ)	(翻刻 資料等)
3 次資料	易	目録	図書館 2 次資料	目録	目録

表 1 「資料レベル相関関係表」

2. 研究方法

以前より図書館を含めた MLA 連携等の異種館連携の必要性は謳われていた[註 3]。そこから導き出される図書館・博物館間の連携は、学習・研究探究心の向上が期待されながらも、具体的な事例は極めて少ない。その連携の障害として、資料の問題・運営の問題・目録の問題など主に博物館側にその問題点が浮き彫りにされている。

こうした問題点、そして今回研究対象としている図書館・博物館連携の現状を分析するために、一機関内に図書館も博物館も併設できる環境である大学に定め、大学図書館・大学博物館連携を研究対象とした。更に大学内で、学習・研究の上で図書資料も博物資料も資料価値の高い、人文系（ここでは哲学・宗教、歴史、語学、文学を対象としている）の博物館と同組織内の大学図書館に焦点を定めた。また人文系大学博物館であっても、大学組織上博物館と同じ分野の学部・学科・専攻等を設置していない大学は調査対象から除外した。これは大学博物館の母体組織である大学の構成組織である学部・学科・専攻に即した運営を行うことにより、同組織の大学図書館との連携の要素が高まるとの想定によるものである。以上の条件の下、調査対象大学博物館は 26 機関 27 館（内総合博物館 10 館、歴史系博物館 17 館）、対象大学図書館は 26 機関 26 館となった[註 4]。

これら人文系大学図書館・大学博物館の予備調査として、Web 調査と 2 大学 3 博物館 1 図書館に聞き取りによる調査で連携の現状を把握した。それを基に連携の実態を調査する上でどのような連携が想定されるか「目録（データ）の連携・統合」、「展示（現物・デジタル）の連携」、「組織（人・施設）の連携」の三つの項目を設定した。そして対象である大学図書館・大学博物館に質問紙を依頼し、先の内容について調査を行った。

2.1 目録の連携

資料の保存、検索を安定させるために目録規則は存在する。図書館では流通資料、ここで述べる 2 次資料を中心としているため早くから国際基準としての目録基準「ISBD」[註 5]が存在して

いる。博物館資料の目録を検討する場合、図書館資料と同様に、各施設独自の目録規則を設定するのではなく、国際基準等の標準化された目録規則に準ずることが望まれる。本来資料の性質が異なることを考慮すれば、図書館資料と博物館資料を同じ目録規則に当てはめるのではなく、それぞれを標準化された目録規則を利用することが現実的である。目録規則に準じているからこそ資料の保存・検索が安定する可能性が高まるのである。

また目録の連携を考慮する際、入力するスタッフのことも検討する必要があるだろう。資料の性質は異なるものの1次資料と2次資料で目録作成を分業化、もしくは集中型の目録作成をしているか、更に機関内の目録基準を作成する際共同事業としているか、様々な内容が想定される。

最終的には博物館1次資料と図書館2次資料がシームレスに調査・検索が望まれ、これが現段階での目録連携の目標となるであろう。

下の表2は目録の連携を図書館と博物館それぞれの内容でレベル化したもので、レベル1に図書館1次資料（貴重資料）の公開と博物館1次資料目録作成とし、レベル3に博物館1次資料・図書館2次資料の横断検索を挙げた。

レベル3	博物館1次資料・図書館2次資料 横断検索	
レベル2	博物館目録作成支援	博物館1次資料目録国際標準化
レベル1	図書館1次資料 Web 等公開	博物館1次資料目録作成
	図書館	博物館

表2 「目録の連携のレベル化」

2.2 展示の連携

本来施設の利用者が図書館と博物館の連携を体験できるものは展示であることは疑いがない。現在は展示についても大きく2種類が想定できる。現物展示とデジタル展示である。現物展示は本来の展示を指すもので、古来より行われている施設が見学者を想定した現物資料の展示である。そしてデジタル展示は近年のデジタル技術の躍進により発展したヴァーチャルの展示である。デジタルを活用した展示のため、施設の現物展示の補足的活用もできるが、近年のWeb環境の発展によりWeb展示という場所を選ばない展示も想定できる。このデジタル技術の発展により、施設という枠を超えた居場所を問わない新たな展示方法が生まれたといえる。

この現物展示とデジタル展示という2種類の展示においても図書館・博物館連携の想定が可能である。この2種類の展示に関して連携をレベル化したものが表3である。

レベル3	ネットワーク連携	展示施設連携
レベル2	展示用PC連携	並列展示連携
レベル1	簡易展示連携（2次資料紹介リーフレット等）	
	デジタル展示連携	現物展示連携

表3 「展示の連携のレベル化」

「現物展示連携」のレベル3は「施設連携」とも関係が深いですが、設問回答内に展示施設の連携のついて触れているものはここに含めた。以上展示における博物館1次資料と図書館2次資料の連携が想定した内容である。

2.3 組織の連携

いかなる方法での図書館・博物館連携が想定されても、その施設運営者である人的な連携が生まれなくては実現されない。この組織の連携は運営を視点にして、図書館・博物館連携を想定したものである。

レベル 3	その他相互サポート	共同体制の取れる施設
レベル 2	質問相互サポート	
レベル 1	人的交流	
人的連携		施設連携

表 4 「組織の連携のレベル化」

ここでも表 4 のとおりレベル化して表記した。しかし今回の設問では「施設連携」について詳細な設問を設定しなかったため、ここはレベルの細分化がなされていない。

3. 結果

3.1 質問紙調査 (表 5 参照)

調査期間は 2007 年 9 月 20 日～10 月 15 日、回答館は博物館 17 機関 18 館 (回答率 66.7%)、図書館 18 機関 18 館 (回答率 69.2%) であった。

調査結果の詳細は別の機会に譲ることとし、その概要は以下のとおりである。

レベル 3	博物館 1 次資料・図書館 2 次資料 横断検索 0.0%		ネットワーク連携 0.0%	展示施設連携 2.8%	その他相互サポート 27.8%	共同体制の取れる施設 11.1%
レベル 2	博物館 目録作成支援 0.0%	博物館 1 次資料目録国際標準化 0.0%	展示用 PC 連携 0.0%	並列展示連携 16.7%	質問相互サポート 30.6%	
レベル 1	図書館 1 次資料 Web 等公開 55.6%	博物館 1 次資料目録作成 50.0%	簡易展示連携 (2 次資料紹介リーフレット等) 0.0%		人的交流 25.0%	
	図書館	博物館	デジタル	現物	人的	施設
	目録の連携		展示の連携		組織の連携	

表 5 「質問紙調査による図書館・博物館連携レベル一覧」

3.1.1 目録 (データ) の連携・統合

レベル 1 で設定した「図書館 1 次資料 Web 等公開」、「博物館 1 次資料目録作成」という連携の基盤については約半数は実施されているものの、それ以外の具体的な事例は見られない。目録連携については横断的情報共有など研究が進められているにもかかわらず [註 6]、図書館では図書資料 (2 次資料中心) の目録に従事し図書形態以外の 1 次資料の目録には関心が低く、また博物館では目録概念そのものが希薄であり、現場では目録の連携に関する認識が低いと見られる。

3.1.2 展示 (施設・デジタル) の連携

「並列展示連携」が約 17%、「展示施設連携」が約 3%と僅かとはいえ現物での展示の連携に関しては具体的事例が見られた。むしろ近年のデジタル化促進により簡便に実施の可能性の高いデジタルでの展示の連携が全く見られない。(しかしこのデジタル展示に関しては、回答上では事例が見られなかったものの聞き取り調査で確認した山形大学の「紅花の歴史文化館」は事実上デジタル展示連携と見ることが出来る)

3.1.3 組織 (人・施設) の連携

各レベルに万遍なく事例が見られるのが人的な組織の連携である。しかし全レベル約 4 分の 1

に収まる場所をみると、率先している機関で連携が盛んであり、それ以外は皆無であると読み取れる。また施設に関しては約 1 割であるが、協調的な施設がある。これについては「現物の展示の連携」とも関連深い内容であり、事例があることが興味深い。

3.1.4 質問紙調査の考察

質問紙調査の概要を紹介したが、決して図書館・博物館連携が積極的に行われていないことは明白である。2「研究方法」で各連携のレベル設定を試みたが、その内容を質問紙の結果を盛り込み、更に三つの連携の仮説を統合したものが表 5 である。なお図書館と博物館で同じ内容の結果は統合での率を出している。それぞれレベルを設定しているものの、連携における重要度や難易度は加味されていない。あくまで一つの目安として提示している。

連携の種別に比較すると、連携の進み具合は「組織の連携」>「目録の連携」>「展示の連携」と見ることが出来る。「組織の連携」は設問設定にも問題があり、施設の内容に関して細かいレベル化など出来なかったものの、全体的に連携が進んでいる。そうとはいえ全機関の 10～30%程度で止まっており、先進的な機関が出てきていると理解するべきであろう。

「目録の連携」はレベル 1 の「図書館 1 次資料 Web 等公開」(図書館)と「博物館 1 次資料目録作成」(博物館)と各館種とも約 5 割は進んでおり、全体の中で一番比率が高い。しかし図書館での 1 次資料の公開や博物館 1 次資料の目録化など、目録連携の下地が出来ているもののその次なる連携事業の展開がなされていない。今回の設定で上の二つをレベル 1 としたものの、連携という意味では直接的ではなく、むしろレベル 2 以降から目録連携と見るべきであろう。先述のとおり異種館連携を想定した横断検索の研究は進んでいるにも関わらず、現場に取り込まれていないのが実情である。

最も事例が見られないものが「展示の連携」で、レベル 1 で設定した簡単な 2 次資料紹介もなされていない。ましてデジタルを介した展示連携は回答上皆無であり、データさえ整えば現物連携よりも容易であるだけに残念である。むしろ事例は少ないものの並列展示連携が 16.7 ポイントあり、想定したレベル 1 に先駆けレベル 2 の事例が見られていることは注目する。この「展示の連携」について今回の連携の想定は、図書館 2 次資料と博物館 1 次資料を検討していたが、図書館・博物館共に 1 次資料で並列展示連携等の連携がなされていた。これについては、特に母体の大学機関が宗教系の場合において、同分野に関して図書館と博物館で 1 次資料を分配しているケースがあり、企画展等で共同展示を実施しているものである。本研究においては想定外の事例であったが、実は現段階で図書館・博物館連携においては有効性の高い内容であり、多くの MLA 連携においても実質的に 1 次資料の連携が中心となっていると想定できる。これについては次の「聞き取り調査」で詳細に触れたい。

資料レベル	取扱い難易度	内容	図書館	博物館
1 次資料	難	希少資料	貴重資料 (図書館 1 次資料)	博物館 1 次 資料
2 次資料	中	流通資料	図書館 1 次資料	博物館 2 次 資料 (レプリカ)
3 次資料	易	目録	図書館 2 次 資料	目録

表 6 「図書館・博物館 1 次資料連携を中心とした資料レベル相関関係表」

総じて図書館・博物館連携の現状を見たとき、下地とも云うべき「組織の連携」は進みつつあるものの、利用者が直接体感できる、横断検索や展示に関しては皆無に等しい。

そうした中でも積極的連携が行われている機関を紹介したい。A 大学 (都合により仮名)・大谷大学・山形大学の 3 大学である。3 大学とも「目録の連携」のレベル 1 は当然のこと、「組織の連携」の人的連携そして「展示の連携」の 1 次資料の並列展示連携は行われている。更に大谷大学

と山形大学は、施設において共同体制が取れており、また山形大学は展示施設連携も行われている。

レベル3	博物館1次資料・図書館2次資料 横断検索		ネットワーク連携	展示施設連携	その他相互サポート	共同体制の取れる施設
レベル2	博物館目録作成支援	博物館1次資料目録国際標準化	展示用PC連携	並列展示連携	質問相互サポート	
レベル1	図書館1次資料 Web等公開	博物館1次資料目録作成	簡易展示連携 (2次資料紹介リーフレット等)		人的交流	
	図書館	博物館	デジタル	現物	人的	施設
	目録の連携		展示の連携		組織の連携	

表7 「A大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」 ※網掛け実施事項

レベル3	博物館1次資料・図書館2次資料 横断検索		ネットワーク連携	展示施設連携	その他相互サポート	共同体制の取れる施設
レベル2	博物館目録作成支援	博物館1次資料目録国際標準化	展示用PC連携	並列展示連携	質問相互サポート	
レベル1	図書館1次資料 Web等公開	博物館1次資料目録作成	簡易展示連携 (2次資料紹介リーフレット等)		人的交流	
	図書館	博物館	デジタル	現物	人的	施設
	目録の連携		展示の連携		組織の連携	

表8 「大谷大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」 ※網掛け実施事項

レベル3	博物館1次資料・図書館2次資料 横断検索		ネットワーク連携[註7]	展示施設連携	その他相互サポート	共同体制の取れる施設
レベル2	博物館目録作成支援	博物館1次資料目録国際標準化	展示用PC連携	並列展示連携	質問相互サポート	
レベル1	図書館1次資料 Web等公開	博物館1次資料目録作成	簡易展示連携 (2次資料紹介リーフレット等)		人的交流	
	図書館	博物館	デジタル	現物	人的	施設
	目録の連携		展示の連携		組織の連携	

表9 「山形大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」 ※網掛け実施事項

各表からは3大学ごとの特出した内容は見出せないが、表5の実行されている連携をほとんど盛り込んでいることが分かる。そうした意味でも3大学の中で連携事業が最も少ないA大学の6項目(図書館1次資料 Web等公開、博物館1次資料目録作成、(1次資料の)並列展示連携、人的交流、質問相互サポート、その他相互サポート)は図書館・博物館連携の基本事項と見るべきであろう。また連携の進行状況を見ると、「山形大学」>「大谷大学」>「A大学」という図式も見えてくる。

この結果を基に、次章のとおり「聞き取り調査」を実施し、連携の具体例の調査を行った。

3.2 聞き取り調査

3.1の「質問紙調査」を基に、図書館・博物館連携の特出事例の精査を目的としたのがこの聞き取り調査である。3.1「質問紙調査」での調査結果の通り、決して図書館・博物館連携は積極的と

は言えない。そうした中でも連携の要素が確認できる 3 機関を選び、聞き取り調査を行った。ポイントとしてはいかにして連携が実現できたのか、その点に焦点を定めた調査である。

調査対象の機関は、A 大学（私立大学）、大谷大学（私立大学）、山形大学（国立大学）である。A 大学においては企画展示等で図書館・博物館の連携のケースがあり、その点の言及にポイントを絞った。大谷大学での調査ポイントは二点。A 大学同様企画展示での連携体制と、「図書・博物館課」として事務局が同一組織内にあり、連携の下地が取れており、そこについて調査を行った。そして山形大学は学内プロジェクト「紅花プロジェクト」が図書館と博物館の合同で立ち上がり、紅花に関する図書館所蔵の貴重資料と博物館所蔵資料双方を活用した上で、山形県内の紅花資料を収集するという大規模な内容で、その成果として現在 Web 上に「紅花の歴史文化館」を公開している。質問紙調査からクローズアップされたこの 3 大学の図書館・博物館連携の現状を聞き取り調査とした。

3.2.1 A 大学の調査

調査は歴史系の博物館施設を主対象とし、企画を中心にした連携の現状について調査を行った（調査期日：2007 年 12 月 12 日）。

当博物館は単独館の施設で、A 大学の記念事業の一環として開設し、「博物館相当施設」の指定を受けている。

博物館開館に際し、学内施設に分散していた資料をまとめたものを博物館資料として収蔵した。その後も新規購入等も進めているが、基本は日本国内では大学として歴史のある A 大学で所蔵していた、宗教関係資料を基にしている。A 大学は宗教系の大学であり、その宗教関係の 1 次資料が主な博物館資料となる。宗教関係の資料は図書資料や立体資料が含まれており、博物館が開設されても図書館所蔵の宗教関係資料の博物館への移籍は行われなかった。そのため大学所蔵宗教関係の 1 次資料を図書館と博物館で分割する形で現在に至っている。

現在 A 大学図書館では電子図書館を運営しており、ここから図書館所蔵の古典籍貴重資料の公開や宗教関係データベース、A 大学史資料など積極的な 1 次資料の公開を行っている。また博物館では Web 公開等のデータベースは作成していないが、博物館目録としてカラー図版付きで所蔵資料の紹介を冊子体で行っている。

質問紙調査でも明らかであったが、基本的に図書館と博物館で共同体制は取られていない。しかし宗教関係の資料を分割して所蔵しあっている関係から、展示等企画内容によって合同で 1 次資料を共有する形で連携が取られているのである。同じ大学内で同じ系統の宗教関係資料を分割所蔵したことが、図書館・博物館連携という意味ではその引き金になった事例である。ただしこの連携は、1 次資料分散による結果であって更にここから連携としての新たな展開が生まれにくい限り共同体制には発展しない。何らかの機会の下、更なる連携事業が望まれる。

3.2.2 大谷大学の調査

大谷大学の調査は「大谷大学図書館」と「大谷大学博物館」を対象に実施した（調査期日：2007 年 12 月 14 日）。事務局が、図書館と博物館が同一組織の「図書・博物館課」の構成を調査の主対象とし、更に展示に関する協調性などについても伺った。

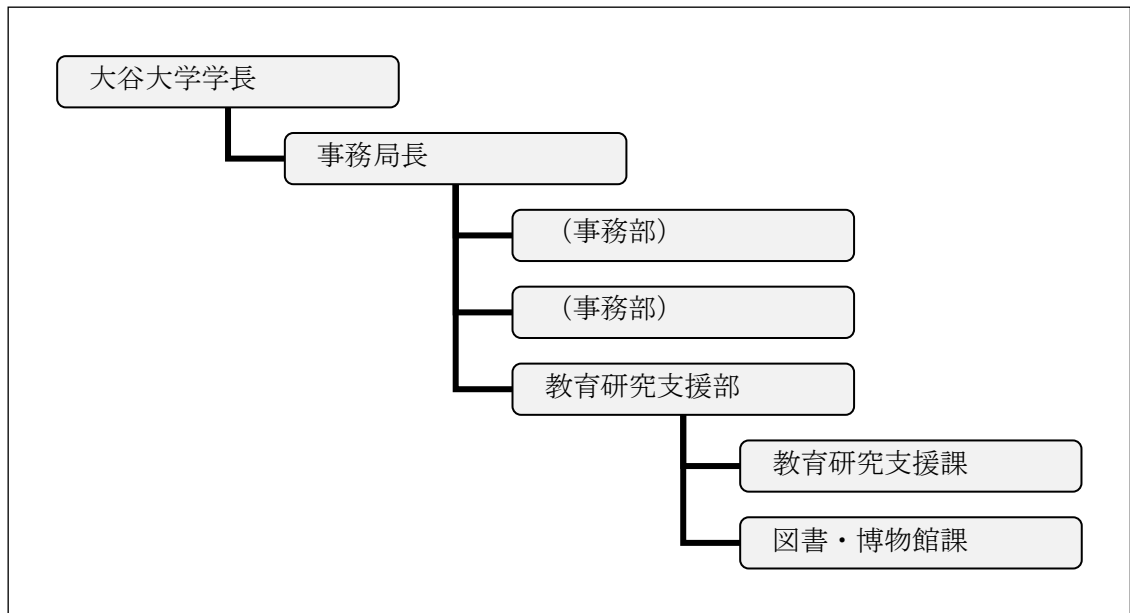


図1 「大谷大学事務局組織図 (部分)」 [註 8]

大谷大学博物館は近代化 100 周年事業の一環で、2003 年に博物館は開館、同年博物館相当施設に指定を受けた。その際本来図書館貴重資料として所蔵していた資料を、その資料の性質ごとに、図書館と博物館に分配した。この点先に紹介した A 大学と異なり、元々大学所蔵 1 次資料を集中管理していた図書館から資料を分配して博物館を開館した大谷大学と、大学所蔵 1 次資料の内図書館所蔵以外のものを集約して博物館を開館した A 大学という図式になる。

しかし先の宗教系の A 大学同様、大谷大学も仏教系大学（真宗大谷派）のため、仏教系資料という観点で図書館と博物館の 1 次資料は共通性が高い。そのため 1 次資料を中心とした企画展示やその他運営において図書館と博物館が協同する機会は多く、また事務局が同組織のこともあり運営に関しても連携体制がとられている。

大谷大学での図書館・博物館連携の主たる事業としては、企画展示等での共同体制と公開データベースの共同運営があげられるが、いずれも元来一機関であったことと現状一組織下にあることから実施された事例である。この点 1 次資料を通じて連携を行っている A 大学と異なり、同一組織という背景から更に共同運営等の連携が行われている。

大谷大学はホームページ上に「貴重書デジタルデータ」を公開しているが、この管理運営を図書館・博物館で運営し、また図書館・博物館共にこのデジタルデータで 1 次資料を紹介している。企画展示、そしてデジタル展示としての図書館・博物館連携が実施された機関である。

3.2.3 山形大学の調査

山形大学の調査は「山形大学附属図書館」と「山形大学附属博物館」を対象に実施した（調査期日：2007 年 12 月 13 日）。山形大学もまた先の大谷大学同様施設・組織が同一で運営している。しかし博物館に関しては、21 世紀に入ってから大学記念事業の一環で博物館を開館した大谷大学と異なり歴史は古く、1952 年には博物館相当施設の指定を受けている。また当時より現在の体制は形成されており、図書館・博物館それぞれの企画について協力体制が生まれていた。なお施設は 1965 年の中央図書館改築に伴い人文科学棟から中央図書館 3 階に移転。更に 1995 年の増改築工事で同じく 3 階の東側の現在の場所に移転し現在に至っている。

こうした早くから協力体制があるため今回調査の中心となった学内推進プロジェクト「紅花プロジェクト」に関して、このプロジェクトのため体制をつくったのではなく、むしろ今までの協力体制の集大成として当プロジェクトが推進したと見るべきである。

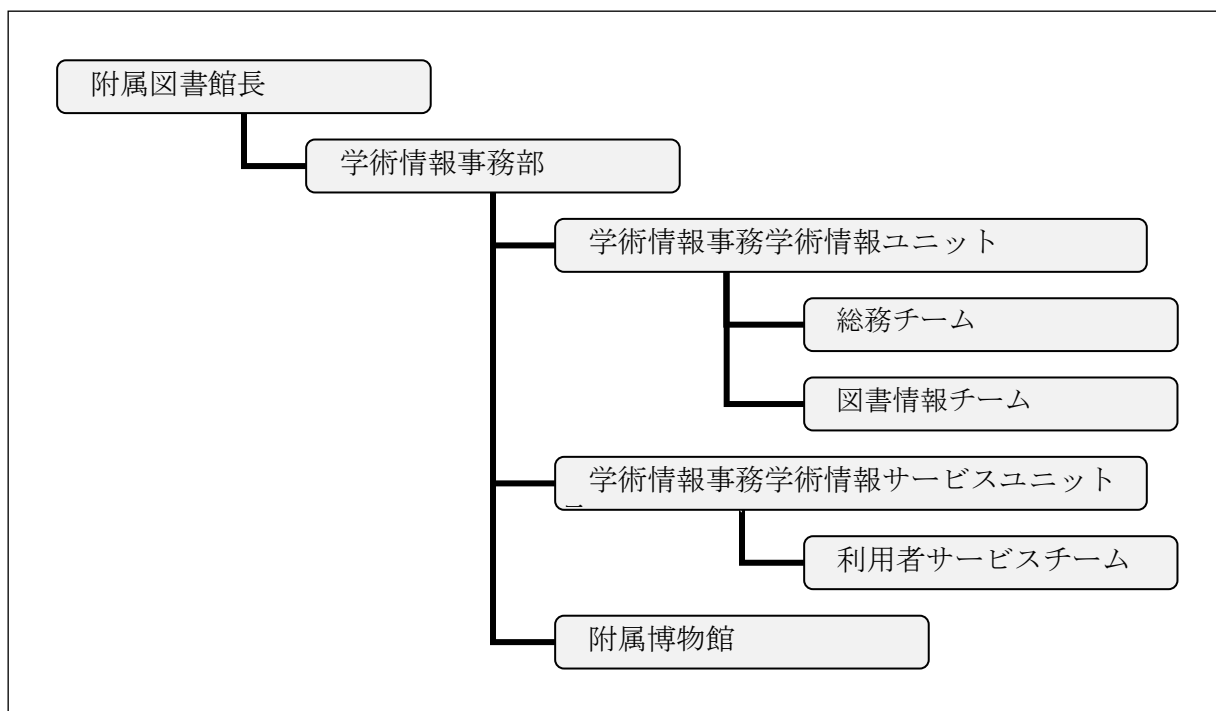


図2 「山形大学附属図書館 組織・機構図（部分）」[註9]

山形大学の「紅花プロジェクト」とは学内推進のプロジェクトで、学長のリーダーシップにより、『各部局等が教育・研究及び社会貢献活動に関して、現在取り組んでいるもの又は予定しているものうち、他大学には見られない独創的又は先進的な取組みを全学で支援・推進し、本学の中期計画の達成を図ることを目的としたもの。』という方針で、平成16年度から学内プロジェクトの構想が開始されたものである。その第1期中期計画として、「独創的・萌芽的研究テーマ（教育内容も含む。）を公募し、1学部（1部門）1件の採択・推進を図る」とし、そこに山形大学附属図書館と山形大学附属博物館で共同し、社会貢献を目的としたプロジェクト「紅花の歴史文化と地域学術資料のデータベース化及び情報発信」（通称「紅花プロジェクト」。以後も「紅花プロジェクト」と表記）を大学に申請した。山形県花でもある紅花はそれ自体が山形県の特産品であり、それだけ県内では親しまれた存在である。その紅花の図書館・博物館両館所蔵資料のデータベース化及び情報発信、県内外の紅花関係文書の調査、両館所蔵未整理古文書の目録作成を行い、また関係機関共同でシンポジウムも開催した[註10]。ここで重要になったのがそれまで博物館で蓄積していた紅花に関する調査・研究の成果である。ここを基本軸に、両館所蔵資料の他に外部機関所蔵紅花関係資料の利用等具体的プロジェクト活動の原動力となったのである。こうしたプロジェクト活動の成果として、現在図書館ホームページ上に「紅花の歴史文化館」としてデータベースが公開されている。



図3 山形大学附属図書館「紅花の歴史文化館」[註11]

「紅花プロジェクト」の成果「紅花の歴史文化館」の構成は次のとおりである。

- A) 紅花文書画像データベース
 - 1. 伊勢屋源助家文書、2. その他の文書
- B) 図書・雑誌全文
 - 1. 紅花関係図書一覧、2. 紅花関係論文一覧、3. 創作紅花料理レシピ集、4. 紅花MAP
- C) 紅花資料目録データベース
 - 1. 紅花文書目録検索、2. 紅花文献目録検索、3. 紅花インデックス検索
- D) 標本・美術品・写真
 - 1. 紅花関係絵図一覧、2. 紅花関係標本等資料、3. 紅花関係写真等資料
- E) 紅花関係映像資料
 - 1. 映像資料一覧
- F) その他
 - 1. 紅花の豆知識、2. 総合学習の事例、3. 紅花関連リンク集、4. 紅花プロジェクト報告書

文書の画像データベースから目録、標本や写真に映像、そして図書に論文、紅花情報まで、紅花に関する総合データベースとして多義に渡った情報を公開していることが重要である。このうち「A) 紅花文書画像データベース」・「D) 標本・美術品・写真」・「E) 紅花関係映像資料」が1次資料、「B) 図書・雑誌全文」が2次資料、「C) 紅花資料目録データベース」が3次資料と、デジタル上で次元を超えた資料体系が整っている。また1次資料から関連2次資料へのリンク付け、あるいは3次資料から2次資料全文へと相互リンクも整っている。

他大学の図書館の電子図書館や博物館のデジタル・ミュージアム等で公開しているデジタル情報に「紅花の歴史文化館」同様翻刻や関連文献にリンクを貼るケースは少なくないが、「紅花の歴史文化館」は図書館と博物館の共同体制で生まれたことでは注目に値する。

この「紅花プロジェクト」が図書館だけのものであったら他機関の1次資料の利用は困難になったろうし、また博物館だけのプロジェクトであったら「B) 図書・雑誌全文」の2次資料の紹介や各項目に2次資料のリンク付け等も実施できない可能性もある。またこれだけの規模のプロジェクトを推進出来たのもシステムや目録作成等各分野に精通した図書館スタッフの協力があつたから

である。これらは長年にわたり図書館と博物館が一組織で運営されていた背景がなせる結果である。

また山形大学附属図書館のホームページ上に貴重資料の紹介もされているが、「紅花の歴史文化館」と比較して細部にわたり次元を超えた資料連携はなされていない。同様に博物館ホームページ上の博物館資料の資料紹介でも、2次資料との連携は皆無である。

以上紹介のとおり、「紅花プロジェクト」も基本的には図書館・博物館所蔵の1次資料連携から構想されているが、公開のデータベースはそこから派生し、その延長上にある図書・論文等の資料紹介や学習支援まで盛り込まれ、結果的に連携の取れた総合データベースとして形成されていることが注目される。このデータベースから利用者の学習向上や研究支援が大いに期待できよう[註12]。

山形大学での図書館・博物館連携の主たる事業は、企画における共同体制とその具体的事例「紅花プロジェクト」である。いずれも長期にわたり同一組織で運営されてきたことによる連携事業である。

しかし山形大学においてもMLA連携を意識して「紅花プロジェクト」が稼働した訳ではなく、状況から自然発生したことも記しておきたい。そのため今後積極的な図書館・博物館の連携が推進されるかは疑問の余地がある。とは言え現状「組織の連携」と言う基盤があるため、図書館と博物館の職員間に組織の障壁は見られず、実際大学主催のオープンキャンパスの折りに図書館と博物館で共同企画も実施している。また通常の図書館・博物館の運営においても、博物館見学後、その内容を確認するためにそのまま図書館の書架スペースに足を運び関係2次資料を確認する利用者が少なくないことなどから考慮すると、「展示施設の連携」として施設・組織が同一である連携のメリットが十分に生きたケースと言える。

このように山形大学においては結果的に図書館・博物館の連携が発生し、その集大成的な存在として「紅花プロジェクト」が生まれたと見てよいだろう。

3.2.4 聞き取り調査の考察

図書館・博物館連携が実施されている主な機関としてA大学、大谷大学、山形大学の3大学に対して聞き取り調査を実施したが、先ず展示と組織の連携について触れたい。

事前調査としての質問紙調査時点で大きく「展示の連携」の事例（A大学、大谷大学）と「組織の連携」の事例（大谷大学、山形大学）の二分化されていると見る事が出来たが、現状での「展示の連携」は図書館・博物館両館所蔵の1次資料の連携であり、共同企画という形に収まる。前章質問紙調査ではこれが連携の一基盤であるように捉えたが、大学内の1次資料を集めただけで、本調査でここから更なる連携の発展は見受けられなかった。

大谷大学は「展示の連携」も「組織の連携」も両方実施した形を取るが、しかし「組織の連携」が行われている機関はデータベースを共同運営（大谷大学）や、協同プロジェクトによる共同事業、そしてそこから資料紹介や学習支援への発展（山形大学）など更なる連携への発展が期待される。その点大谷大学と山形大学が、A大学と大きく異なる点は「組織の連携」で、共に図書館と博物館の事務局が同一部署、そして「共同体制の取れる施設」として同施設内に設置されている機関がこの二つである。これについては質問紙調査の回答でも見られた[註13]が、大学機関において未だ組織体制化が顕在化しており、同一機関の資産を活性化させようとする図書館・博物館連携において大きな足枷になっていると見る事が出来る。大学全体の活性化、そして情報公開が叫ばれている昨今、まだ図書館や博物館という現場において組織の壁は高いことが明示されたと言える。

組織や施設の同一化は決して簡単に進められるものではないが、本調査で見える限り図書館・博物館連携の大きな鍵になっていることは間違いない。今後図書館・博物館連携を推進するに際し、如何に組織の同一化に近い共同体制を構築できるか、これが問題になってこよう。

最後に今回調査対象の組織連携の実施されている2大学においてもまだ図書館2次資料と博物館1次資料の横断検索は実施されていない。組織内の共同体制が取れていれば具体的にメタデータ運用の検討を行い、資料次元を超えた横断検索等更に連携の可能性を高めていくことは想定できる。多くの機関で障害となっている組織間の壁が存在しない分、更に先進的な図書館・博物館の連携事業を率先していくことを希望するところである。

4. 大学図書館・大学博物館連携の現状分析と要件

現状において大学図書館・大学博物館連携は決して積極的ではなく、むしろその事例を探すほうが難しい。そうした中で現段階でも各館博物館 1 次資料の目録化など基礎構築に関して高い関心を示し、また各設問のコメントの中にも「学術情報の有効活用としての連携」を示唆する意見も散見されるなど、連携の基盤となる下地は出来つつある。また「展示の連携」においては図書館・博物館で各館所蔵の企画テーマの内容に即した 1 次資料提供の連携が行われている事例は、少ない連携の中でも目を引く。

しかし現状を見るに、1 次資料を介した「展示の連携」があっても更なる拡張を見るのは難しい。大学図書館・大学博物館連携を検討する際、やはり一番の障害は博物館の主たる資料である 1 次資料であろう。1 次資料という希少資料であるがために目録作成も安易ではなく、取り扱いも難しい。しかし連携の相方である図書館は 2 次資料を主たる資料としながらも、1 次資料の取り扱いにも長けており、早いうちから 1 次・2 次・3 次資料を混在した運営を行っていることは異種館連携を想定した場合重要である。そうした意味でも大学図書館・大学博物館連携には博物館 1 次資料の目録化と図書館の支援が重要と想定した。

だが現段階の連携事業は大学図書館・大学博物館が組織そして施設で同一構造になっていることが望ましいという結果になった。3.2「聞き取り調査」のとおり、大谷大学と山形大学ではこうした要素の基連携事業が進んでいる。これは偏に大学機関が未だ学部や部局ごとの組織運営に主眼が置かれている結果と見る事が出来る。これも先述のとおり、図書館・博物館連携という視点で考えた時、この組織間の壁は高く、共同体制の構築すら困難である。その意味でも組織の障壁が低くなっている組織・施設の同一構造こそが連携促進のキーワードになっており、現状積極的な大学図書館・大学博物館連携はこうした組織からしか見ることが出来ない。すなわち大学図書館・大学博物館連携を実現化するためには、いかにして組織的連携を構築するかが焦点になる。

しかし図書館・博物館連携を促進させるためとは言え、組織改変や施設改築は安易なものではなく、中長期計画等本格的な事業計画が実施された時でしか実現できない。その方策として考えられるものは、プロジェクトによる共同体制の構築である。3.2.4「山形大学の調査」のとおり、山形大学の「紅花プロジェクト」自体は図書館と博物館が長年同一組織で運営された賜物であるが、他機関においても同様のプロジェクトを立ち上げることで組織を超えた共同体制としての大学図書館・大学博物館連携が実現できよう。連携の障害のもう一つとして、相手館の実態や現状を理解していないといった回答の記述も各設問で散見された。これは組織の障害と類似した内容ではあるが、やはり別の施設の運営は把握できにくく、何か特別な機会がない限り共同体制の実現は困難な状況にある。その打開の意味でも特別企画としてのプロジェクトを立ち上げ、ここを基軸に機関ごとの図書館・博物館連携を模索していくことが望ましい。

図書館・博物館連携はまだ図書館界・博物館界でも率先して行われている事業とは異なる、新規事業と捉えることが出来る。そのため大きな拍車が掛からない限り具体的な進展は難しい。多くの組織・施設が同一構造になっていない機関は新規事業として共通概念としての共同体制を構築するためのプロジェクト設置が基に、機関に即した図書館・博物館連携を稼動し、具体的成果を生み出しながら通常事業として連携を促進していくことが現段階で提案できる連携のプランである。その結果山形大学「紅花の歴史文化館」同様の学内資料の有効活用が可能となり、更に大学組織内そして社会に還元され総合学習の場を提供できるようにもなり得る。これこそが異種館連携の目指す指針となろう。

しかし本研究の調査対象を定める際、大学内に博物館と同じ内容の学部・学科・専攻等を設置していない大学は除外したにも拘らず、聞き取り調査を実施した 3 大学においても大学内の学部・学科・専攻等の支援もしくは学習教育の実践が見受けられなかったことは残念である。図書館も博物館も、母体機関・組織を支援するための施設であり、その点大学機関においては学習・教育・研究支援が大学図書館・大学博物館に課せられた使命である。その両施設の連携において学部・学科・専攻等の支援は、大学図書館・大学博物館連携の進むべき方向のはずである。本研究ではその点明示できず、人文系の大学図書館・大学博物館連携においては大学学部・学科・専攻等の支援は行われておらず、調査対象の抽出も適切ではなかったと言える。しかし継続して大学における MLA 連携の調査を実施する場合、今後もしくは他分野においてこのような支援体制が存在するか注目したい。

人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館の連携という、図書館・博物館連携を検討す

る上で一部に焦点を当てたが、総合的な視点から連携を研究することが出来た。今後は人文系の枠を超え、社会系・芸術系・理系、そして公共施設での事例等での文書館との連携をも加えた MLA 連携の可能性も含め幅広く研究を推進していくことが望まれよう。

謝辞

本論文は、筑波大学図書館情報メディア研究科に提出した修士論文を基としています。質問紙調査そして聞き取り調査にご協力頂いた大学図書館・大学博物館の方々に、深く感謝申し上げます。

註

- [1] 2007年2月開催の東京大学130周年記念公開シンポジウム「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館—連携に果たす大学の役割」や、慶應義塾大学のワークショップ「博物館・美術館・公文書館・図書館の連携」、私立大学図書館協会第69回(2008年度)総会・研究大会(会期:2008年9月11日~12日、会場:國學院大學)メインテーマ「大学図書館と博物館・文書館との連携」などがある。またアート・ドキュメンテーション学会創立20周年記念第4回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム(会期:2009年12月4日~5日、会場:東京国立博物館平成館大・小講堂)も「日本のアート・ドキュメンテーション—20年の達成—MLA連携の現状,課題,そして将来—」として開催を予定している。
- [2] 図書館(2次)資料と博物館(1次)資料の連携では、博物館図書室や文書館図書室の存在が外せない。本来1次資料を主に扱う博物館や文書館の図書室なので、それを補完する関係2次資料を所蔵しており、MLA連携を想定した場合注目すべき施設となるはずである。しかし現在博物館図書室・文書館図書室の明確な活動文献は少ない。また今回詳細は触れないが、3.1「質問紙調査」で大学博物館図書室の活動に関する質問事項を盛り込んだが、連携を助成するような顕著な活動は見いだせなかった。そのため本研究では独立館としての大学図書館・大学博物館を研究対象としており、博物館図書室・文書館図書室の運営について別の機会に譲りたい。
- [3] 図書館・博物館連携等、図書館と異種館連携については岡本包治(1983)をはじめ、中央審議会「生涯教育について(答申)」以降連携に関する文献が散見される。なお中央審議会「生涯教育について(答申)」(第26回答申(昭和56年6月11日))については次に詳細が提示されている。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/810601.htm, (参照2009-11-22)
- [4] 質問紙調査の対象館は、高等教育機関(大学、短期大学、高等専門学校)に設置されている人文系資料を対象としている博物館としたが、その内訳は日本博物館協会『全国博物館園職員録』平成18年版、『全国博物館総覧』(加除式)より総合博物館・歴史系博物館の分類された博物館を選び、更に総合博物館の内人文系を備えた大学博物館、ならびに歴史系博物館の内人文系の大学博物館を調査対象とした。
- [5] ISBD は次に詳細が提示されている。
<http://www.ifla.org/VII/s13/pubs/isbdg.htm>, (参照2009-11-22)
- [6] 「広領域分野資料の横断的アーカイブズ論に関する分析的研究(研究課題番号:13480102、代表者:八重樫純樹、2001年度~2003年度)」など多くの研究成果が発表されている。
- [7] 質問紙ではネットワーク連携は“行われていない”との回答であったが、「紅花の歴史文化館」は実質ネットワーク連携のため、表9では実施とした。
- [8] 図1「大谷大学事務局組織図」は大谷大学ホームページ「組織図」を基に、聞き取り調査で確認し作成した。大谷大学ホームページの組織図のアドレスは次のとおり。
http://www.otani.ac.jp/annai/college_data/gd01.html#soshiki, (参照2009-11-22)
- [9] 山形大学附属図書館組織・機構図は聞き取り調査で確認し作成した。なお附属博物館は通常学術情報事務部に直結しているが、事務処理上は学術情報事務学術情報ユニットの総務チームに属する。附属博物館としては博物館長が在籍している。
- [10] 「紅花プロジェクト」は報告書が「紅花の歴史文化館」に掲載されており、詳細は報告が載っている。
<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/benibana/project/tanjo.pdf>, (参照2009-11-22)
- [11] 「紅花の歴史文化館」は説明のとおりに独立した電子図書館の体をなしている。しかし大谷大学の「貴重書デジタルデータ」のように、附属博物館にリンクが貼られていない。

- <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/benibana/>, (参照 2009-11-22)
- [12] 「紅花の歴史文化館」は「その他」の「2.総合学習の事例」で小中学校の総合学習での成果が報告されている。また現在でも「ベニバナたんけんたい」として小学校低学年用の学習参考資料のデータベースも公開して学習活動の支援を実施している。
- [13] 質問紙調査のコメント記載部分に、異種館連携の促進を希望しても組織の壁に妨げられる等の記述が度々見られる。コメントの詳細については別の機会に譲りたい。

参考文献

- [1] 伊能秀明. ユニバーシティ・ミュージアムの望ましいあり方: 明治大学博物館の生涯教育事業と今後の方策について. 明治大学博物館研究報告. 2006. 11, p.29-44.
- [2] 上野恵司. 大学博物館の設置状況と収蔵資料の活用: 考古学資料を中心に. 立正大学文学部論叢. 2003. 118, p.43-55.
- [3] 大谷大学図書館・博物館. “大谷大学貴重書デジタルデータ”. 大谷大学. http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/library/nab3mq0000017hw.html, (参照 2009-11-22).
- [4] 加藤有次, 鷹野光行, 西源二郎, 山田英徳, 米田耕司編. 博物館資料論. 雄山閣出版, 1999, 247p., (博物館学講座, 5).
- [5] 岡田茂弘. ユニバーシティ・ミュージアムの必要性と構想. 東京家政学院生活文化博物館年報. 1996. 3・4, p.31-33.
- [6] 岡本包治. 公民館・図書館・博物館の連携: これからの住民の学習援助方策. 社会教育. 1984. 39(5), p.17-21.
- [7] 熊野正也. 大学博物館の社会的な係わりとその接点. 明治大学博物館研究報告. 1996. 1, p.3-14.
- [8] 黒沢浩. 大学博物館における教育活動: 生涯学習と大学教育のかかわり. 明治大学博物館研究報告. 1997. 2, p.3-17.
- [9] 坂井知志. 大学博物館の可能性. エストレーラ. 2003. 113, p.2-8.
- [10] 菅野育子. 欧州の情報政策による図書館、博物館間協力の可能性. アート・ドキュメンテーション研究. 2006. 13, p.3-9.
- [11] 菅野育子. 欧米における図書館、文書館、博物館の連携: Cultural Heritage Sector としての図書館. カレントアウェアネス. 2007. 294, CA1644. <http://current.ndl.go.jp/ca1644>, (参照 2009-11-22).
- [12] 高橋有美. 大学博物館に関する序論的検討: 大学との関連性を中心に. 生涯学習・社会教育学研究. 2001. 26, p.51-58.
- [13] 田窪直規. 「博物館資料情報のための国際指針」について: 図書館資料と文書館資料の国際基準標準との関係で. アート・ドキュメンテーション研究. 2003. 10, p.37-49.
- [14] 田窪直規, 岡田靖, 小林康隆, 村上泰子, 山崎久道, 渡邊隆弘. 資料組織概説. 樹房社, 2007. 199p., (新・図書館学シリーズ, 9).
- [15] デジタルアーカイブフォーラム. “Digital Archive Forum: デジタルアーカイブと連携のフォーラム”. 2008-01-07. <http://daf.lib.keio.ac.jp/>, (参照 2009-11-22).
- [16] 研谷紀夫. 海外における Digital Cultural Heritage: MLA 連携と統合化が鍵を握る、次世代の Digital Cultural Heritage. 画像ラボ. 2008. 19(4), p.1-6.
- [17] 中野目徹. 公文書館の所蔵資料: 図書館・博物館との連携に向けて. 図書館雑誌. 1990. 84(8), p.505-508.
- [18] 日外アソシエーツ株式会社編. 大学博物館事典: 市民に開かれた知とアートのミュージアム. 日外アソシエーツ, 2007, 590p.
- [19] 日本図書館情報学会研究委員会編. 電子図書館: デジタル情報の流通と図書館の未来. 勉誠出版. 2001, 204p., (シリーズ図書館情報学のフロンティア, 1).
- [20] 日本図書館情報学会研究委員会編. 図書館目録とメタデータ: 情報の組織化における新たな可能性. 勉誠出版. 2004, 193p., (シリーズ図書館情報学のフロンティア, 4).
- [21] 日本図書館協会図書館調査事業委員会編. 日本の図書館: 全国公共読書施設および大学図書館の実体調査・集計. 2006, 日本図書館協会, 2007, 611p.

- [22] 日本博物館協会編. 全国博物館総覧. ぎょうせい, 1986(加除式), 4冊.
- [23] 日本博物館協会編. 全国博物館園職員録. 平成18年. 日本博物館協会. 2006, 1冊.
- [24] 宮崎健司. 大谷大学博物館の設立と図書館. 大学図書館研究. 2004. 72, p.50-57.
- [25] 森山光良. 総合目録ネットワークの現状と課題: 異館種連携による統合的な電子図書館ネットワークの実現に向けて. 図書館雑誌. 2002. 96(3), p.167-170.
- [26] 文部省生涯学習政策局政策課. “生涯学習について(答申)”. 文部科学省. 1981-06-11. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/810601.htm, (参照 2009-11-22).
- [27] 山形大学附属図書館. “紅花の歴史文化館”. 山形大学附属図書館. 2007-11-02. <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/benibana/>, (参照 2009-11-22).
- [28] 山田篤, 安達文夫, 小町祐史, 河合正樹. 博物館情報の分類マッピングを用いた横断検索. 画像電子学会第32回年次大会予稿集. 2004, p.97-100.
- [29] Alexandra Yarrow, Barbara Clubb and Jennifer-Lynn Draper. Public Libraries, Archives and Museums: Trends in Collaboration and Cooperation, The Hague, IFLA Headquarters, 2008, 50p., (IFLA Professional Reports, 108).
- [30] Holm, Stuart A. 博物館ドキュメンテーション入門. 田窪直規監訳. 勁草書房, 1997, 156p.
- [31] International Council of Museum. “The CIDOC Conceptual Reference Model”. ICOM. <http://cidoc.ics.forth.gr/>, (accessed 2009-11-22).
- [32] International Council of Museum. “International Guidelines for Museum Object Information: The CIDOC Information Categories”. ICOM. <http://cidoc.mediahost.org/guidelines1995.pdf>, (accessed 2009-11-22).
- [33] The ISBD Review Committee Working Group set up by the IFLA Committee on Cataloguing. “ISBD(G): General International Standard Bibliographic Description”. Revised edition. IFLANET. 1992. <http://www.ifla.org/VII/s13/pubs/isbdg.htm>, (accessed 2009-11-22).
- [34] Zorich, Diane M., Waibel, Gunter, Erway, Ricky. Beyond the Silos of the LAMs: Collaboration among Libraries, Archives and Museums. OCLC. 2008, 59p.

- 表1 「資料レベル相関関係表」
- 表2 「目録の連携のレベル化」
- 表3 「展示の連携のレベル化」
- 表4 「組織の連携のレベル化」
- 表5 「質問紙調査による図書館・博物館連携レベル一覧」
- 表6 「図書館・博物館1次資料連携を中心とした資料レベル相関関係表」
- 表7 「A大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」
- 表8 「大谷大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」
- 表9 「山形大学 図書館・博物館連携レベル一覧表」
- 図1 「大谷大学事務局組織図(部分)」
- 図2 「山形大学附属図書館 組織・機構図(部分)」
- 図3 山形大学附属図書館「紅花の歴史文化館」